

第197号

平成22年11月10日

# 病 院 だ よ り

国際親善総合病院

新型インフルエンザウイルスについて

島崎 信夫

脳血管内治療

仁木 淳

地域医療連携室・医療福祉相談室移転のお知らせ

館野／井出

国際親善総合病院

〒245-0006 横浜市泉区西が岡1-28-1  
TEL 045(813)0221 (代表)  
FAX 045(813)7419 (庶務課)

URL <http://shinzen.jp>

国際親善総合病院看護部  
モバイルサイト



# 新型インフルエンザウイルスについて

インフルエンザが流行する時期になり、また最近では新型インフルエンザの話題をよく聞くようになりました。ヒトに感染するヒトインフルエンザウイルスにはA型、B型、C型とあり、いつも流行するのは専らA型です。A型ウイルスにはヒト型以外にも鳥型やブタ型などあります。このA型ウイルスの表面にはウイルスの増殖に必要なHAタンパクとNAタンパクという2種類の突起がありますが、ウイルスは非常に変異しやすいため、HAは16種類、NAは9種類の型が発見されています。つまりその組み合わせとして自然界には16×9で144種類の型のA型ウイルスが存在します。ヒト型はHAが3種類、NAが2種類と計6種類の型のウイルスがあります。一方鳥型には144種類のすべての型があります。この違いはその起源にあると言われ、鳥類は1億年以上の歴史があり、長い年月をかけて鳥型ウイルスが変異を繰り返し144種類もの型になったと考えられています。一方ヒトの起原はわずか数十万年前であり、ヒト型ウイルスはこの間6種類しか存在できていません。この様に考えると人類に大流行する新しい型のウイルス（7番目）が次に誕生するのは当分先の話ではないでしょうか。昨年騒がれた豚インフルエンザはヒトに大流行しましたが、よく調べると昔流行した型に近いことがわかりました。

インフルエンザにかかったときは、十分な休息と水分・栄養補給に尽きます。熱はウイルスの活動を弱めますので、解熱剤で熱を下げるとウイルスは死滅しないため症状は長引きます。またインフルエンザ脳症はウイルスそのものではなく、強力な解熱鎮痛薬（アスピリン、イブプロフェン、ジクロフェナク、メフェナム酸など）が原因であったことが明らかとなりました。

このためインフルエンザの時はこれら解熱鎮痛薬を服用しない方がよいでしょう。さらに最近の研究論文ではタミフルはインフルエンザの重症化を防げないことも明らかとなりました。

インフルエンザは風邪症候群の一つです。家で安静にするのが一番のようです。

薬剤部・ICT委員長 鳥崎 信夫

強力な解熱鎮痛薬は



# 脳血管内治療 ～脳動脈瘤や脳梗塞の治療法～

みなさんは「脳血管内治療」と聞いてどんなものを思い浮かべるでしょうか？

直達手術の難しい病気に対する次善の策として考案されたもので、数ミリ程度しかない脳の血管の内部から、その病気を治療しようという方法です。ようやく2000年に入って保険適応も広がり、広く認知されてきました。脳神経外科の認定・専門医制度が1966年からであることを考えると、新しい分野だということがわかります。放射線治療医や神経内科医も治療を行います。日本で治療を行うのは我々脳神経外科医が大部分です。治療は血管の中に入れたカテーテルという管を通して治療を行います。カテーテルとは血管を傷つけないように柔らかく作られたストローのようなものと思ってください。一足先に皆さんの市民権を得た心臓カテーテル治療と非常によく似ていますが、脳血管ではマイクロカテーテルと呼ばれる更に細い径1mm程度のストロー状のものをカテーテルの中に通して使います。

具体的には、くも膜下出血を起こす脳動脈瘤というコブをプラチナ製のコイルで詰め固めたり、脳梗塞になって詰まった血管を流れるようにしたり、腫瘍などのデキモノに流れる血管を詰めて成長できないようにさせたり、異常な血管や出血した血管を詰めたりします。また最近では狭い血管に対してステントと呼ばれる金属製の管を入れて広げたり、脳梗塞急性期に血栓溶解薬で溶けきらなかった血栓を機械的に取り除いたり、と、どんどんその治療方法が広がり、進歩している分野でもあります。

現在では脳神経疾患の治療の一端を担うとても重要な治療法であるといえます。

脳神経外科医長 仁木 淳

## ご案内

このテーマは

平成22年12月10日(金) 15:00～約1時間の健康懇話会にて

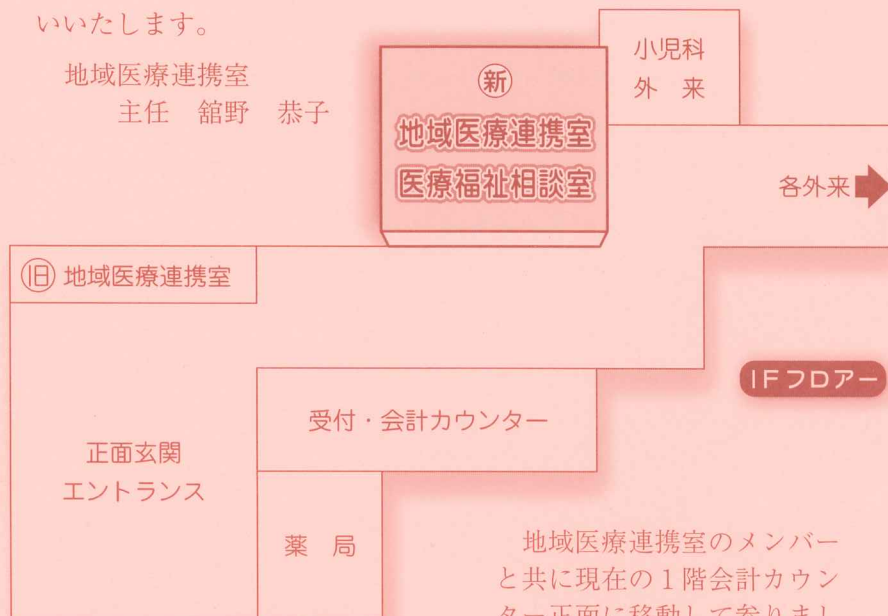
講演予定です。

**(入場無料、予約不要、どなたでもご自由にご参加ください。)**

## 地域医療連携室 医療福祉相談室 移転のお知らせ

『顔の見える地域連携室』として4年前から正面玄関脇のカウンターで、時には「トイレはどこですか?」「駐車券は先に押印しますか?後ですか?」等々の患者さんからの声かけがあり、とても身近な「地域医療連携室」として運営して参りました。今回移転とともに医療福祉相談室と同室となり今まで以上に親しまれ、皆さまのお役に立てるよう努力して参りますのでよろしく願いいたします。

地域医療連携室  
主任 館野 恭子



地域医療連携室のメンバーと共に現在の1階会計カウンター正面に移動して参りました。各種制度や施設利用等は主にソーシャルワーカーが対応いたしますが、内容によりそれぞれの部署で、または多職種にて協力しながらご相談に応じています。これからもできる限り利用しやすい相談室をめざしたいと思っております。

医療福祉相談室主任 井出 みはる